

児童の学級集団意識と体育授業における学習行動との 関係性に関する一考察 — 児童の発話内容に着目して —

浅野 勇¹, 河本 岳哉², 村上 雅之³, 中島 寿宏⁴

A study on the relationship between the pupils' consciousness about their classroom and pupils' learning behavior of physical education class in elementary school — Focused on the contents of the pupils' utterances —

Yu Asano¹, Takeya Kawamoto², Masayuki Murakami³, Toshihiro Nakajima⁴

Abstract

Some research focusing on the pupils' consciousness about their classroom and learning results in physical education classes have been reported. However, learning behavior precedes learning results, it is unlikely that the pupils' consciousness about their classroom directly related to learning results. The purpose of this study is to clarify the relationship between the pupils' consciousness about their classroom and learning behavior in physical education classes using text mining and context analysis. Participants were 61 pupils, enrolled in two schools in Sapporo, were included in this study. The lesson contents were tag rugby, volleyball, high jump, and safety area basketball. The data collected were the pupils' consciousness about their classroom scale, the contents of utterances. The results of the analysis were categorized into two groups: high group consciousness and low group consciousness, based on the median values of group consciousness obtained from Class A' and Class B'. Co-occurrence networks (KHcoder3), word tree (NVivo 12), were output and analyzed using text mining. Regarding the contents of utterances, it was found that the group with high consciousness about their classroom gave positive comments, instructions, and advice to their peers. Conversely, the group with low consciousness about their classroom gave negative advice to their peers and had a negative attitude toward learning, giving up. Based on previous research, it can be inferred that the fact that the group with high consciousness about their classroom give positive advice to their peers related to pupils' independent learning attitude and skill and cognitive learning results in physical education classes. By increasing the number of target classes and lessons, it would be possible to examine in more detail the relationship between the pupils' consciousness about their classroom and learning behavior in physical education classes.

key words: The Pupils' Consciousness about Their Classroom, Learning Behavior, The Contents of Utterances

1. 北海道教育大学大学院教育学研究科
北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1番5号
2. 北海道教育大学附属札幌小学校
北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1番10号
3. 札幌市立北九条小学校
北海道札幌市北区北9条西1丁目1
4. 北海道教育大学札幌校
北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1番5号

1. Graduate School of Education, Hokkaido University
of Education
Ainosato 5-jo 3-chome 1-5 Kita-ku Sapporo
2. Sapporo Elementary School Attached to Hokkaido
University of Education
Ainosato 5-jo 3-chome 1-10 Kita-ku Sapporo
3. Sapporo Kitakujyo Elementary School
Kita 9-jo Nishi 1-chome 1 Kita-ku Sapporo
4. Hokkaido University of Education Sapporo
Ainosato 5-jo 3-chome 1-5 Kita-ku Sapporo

著者連絡先 浅野 勇
asa6456no@gmail.com

I はじめに

学級集団は、「学校教育という制度においてその目標を達成するために編成される公的に最も基礎的な単位集団であり、通常多数の児童と一人の教師からなる集団である」と捉えられてきた(根本, 1983, p.212)。また, 根本(1987, p.2)は, これまでの学級集団をテーマとした諸研究を整理しながら, 学級集団は, 子ども自身の知的, 情意的, 社会的, 身体的, 技能的発達を目的として編成されていることを指摘している。これらの研究を踏まえると, 学級集団というのは, 子どもたちが教育の享受を通して, 様々な発達を遂げることができるように編成される単位集団であるといえる。小中学校における教育活動の多くは学級単位で行われているため, 学級集団と授業との結びつきが強いことは容易に想像できる。その中でも, 教科特性を背景として体育授業と学級集団との関係が強いことが指摘されてきた。日野ほか(2000, p.600)は, 体育授業は小集団(グループ)での活動を基本としており, 子ども相互の関わり合いが不可欠であり, 課題解決的に学習する場面が多いことを報告している。また, 体育授業は学習集団として自主的に学習する機会が多くなる(米村ほか, 2004, p.232)ことに加え, 競争や協働の経験を通して, 互いに協力することや自己の役割(責任)を果たすなどの意欲を育てることが教科の目標としても設定されている(文部科学省, 2017, pp.11-12)。これらを踏まえると, 体育授業は子ども同士が関わり合う集団としての学習が多いという教科特性により, 学級集団との関係が強調して指摘されてきたと考えられる。さらに, 学級集団は所属している児童生徒の学校生活意欲やソーシャルスキル(武蔵・河村, 2015), 学習意欲(河村・武蔵, 2016), 学力(小野寺, 2020)など様々なものに影響を及ぼすことが明らかにされてきたため, 体育授業を学級づくりや学級経営にどのように活かしていくのかという視点から議論が行われてきた。

体育授業の教科特性を踏まえた上で, 体育授業と学級集団との緊密な関係についてはこれまで経験的に語られてきた。しかし, 体育授業と学級集団との関係について実証的に分析した研究が行われていなかったことから, 日野ほか(2000)は子どもの学級集団意識と子どもが行う体育授業評価に着目し, 学級集団意識と体育授業における学習成果との関係について検証を行っている。その結果, 多くの次元間で有意な正の相関が認められたことを明らかにしている。また, 細越・鋤柄(2002)も学級に対する意識と体育授業評価について, 日野ほか(2000)と同様の結果が認められたことを報告している。そのほか, 体育授業と学級集団との関係だけではなく, 体育授業における小集団での課題解決学習が学級集団意識に影響を及ぼすことも示唆されている(巽, 2018)。これらの報告から, 子どもの学級集団意識と体育授業における学習成果が緊密に関係していると考えられ, 体育授業と

学級集団とのつながりが示唆されてきた。

これまで体育授業における学習成果として捉えられてきた授業評価については, 児童による主観的な授業評価によって授業成果の全てを理解することは困難であるとしても, 授業成果を推察するための重要な手がかりを与えるものである(高橋ほか, 1989a, p.193; 長谷川ほか, 1995, pp.91-92)と考えられてきた。その一方で, あくまでも子どもが主観的に感じた印象を評価するのであり, すべての評価次元に関わって, 子どもの心情的気分が評価に影響することが指摘されている(平野ほか, 1997, p.38)。そのため, 子どもが行う授業評価を学習成果として捉える妥当性の問題があり, 体育授業と学級集団の関係について更なる実証的な検討を行う必要があるといえる。

さらに, 中井ほか(1994, p.2)が解釈したPieron and Cheffrs(1988)によって提唱された体育授業研究のモデルを踏まえると, 子どもの特性(=コンテクストの変数)と学習成果の間には子どもの学習行動が存在するため, 学級集団意識が直接学習成果と関係することは考えにくく, 学級集団意識と子どもの学習行動が関係していることで, 間接的に関係していると考えることが妥当である。さらに, 平成29年に行われた小学校学習指導要領の改訂で示されている育成を目指す資質・能力の三つの柱の一つである「思考力, 判断力, 表現力等」の中で, 伝える相手や状況に応じた表現力はまさに学習行動を通して培われるものであることから, 学習行動に着目することが重要であるといえるだろう。そのため, 子どもの学級集団意識と体育授業における学習行動との関係について検討を行うことで, 日野ほか(2000, p.600)が述べているような学校教育における体育授業の意義の再評価や体育授業が学校現場における教師の学級づくりや学級経営の一助となることを強調できると考える。

ここまで学級集団意識と体育授業における子どもの学習行動との関係の検討の必要性について述べてきたが, 体育授業研究における子どもの学習行動を捉えるために用いられてきた組織的観察法にも課題があるといえる。組織的観察法は認知活動について生徒の頭の中の思考活動を外からみて評価できないため, まじめに取り組むと判断されれば, すべて「認知のALT」にカウントされ, 運動への従事についても同様であることが報告されている(高橋ほか, 1989b, p.41)。つまり, 組織的観察法は客観的に学習行動をカテゴリー化できる反面, 具体的な学習の様子について分析が困難であることが課題として挙げられる。そのため, 学習行動の一側面として授業内における子どもの発話内容を収集し, 量的な分析に加え, 文脈分析といった質的な分析を行い, 具体的な学習の様子を捉える必要がある。

そこで本研究では, 児童の学級集団意識と体育授業における学習行動との関係性について, テキストマイニングによる量的な分析と文脈分析から検証することを目的とする。体育授業における児童の発話内容という質的な

データを収集・分析することで、学級集団意識が学習への取り組み方、他者との関わり方とどのように関係しているのかについて検証を試みる。

Ⅱ 研究方法

1. 対象校・対象児童・対象教師

本調査では、札幌市内のF小学校に在籍する教師Aが担当する6年生のA'学級35名（男子19名、女子16名）及びK小学校に在籍する教師Bが担当する6年生のB'学級26名（男子12名、女子14名）、計61名（男子31名、女子30名）を対象とした。小学校においては、対象校の校長に了承を得た上で、対象児童の保護者に対して事前に書面で、研究の目的、方法、手順、結果の公表方法、プライバシーの保護、調査を拒否することができることなどについて説明を実施している。また、児童に対しても質問紙の中で答えたくない質問があった場合については回答しなくても良いことや回答の有無や内容については成績に一切関係がないこと、データ収集を断ることができること、調査に参加しないことも可能であることを担任から口頭で伝え、調査への参加意思を確認している。なお、本研究は北海道教育大学研究倫理委員会の承認を受けて実施された（承認番号2021081006）。

2. 調査時期・授業内容

調査時期は、2021年6月中旬から12月初旬であった。A'学級ではゴール型ボール運動の全7時間で構成されるラグビーの単元7時間目とネット型ボール運動の全7時間で構成されるバレーボールの単元7時間目を対象とした。また、B'学級は陸上運動の全6時間で構成される走り高跳びの単元5時間目とゴール型ボール運動の全6時間で構成されるセーフティーエリア・バスケットボールの単元5時間目を対象として調査を実施した。単元の流れや構成については単元計画表で示すこととする（表1）。単元計画表は、調査実施前にそれぞれの学級を担当する教師A及び教師Bに作成してもらい、授業を実施した。対象授業の選定理由については、以下に明記する。

3. 調査内容とデータ収集

調査内容については、質問紙調査と授業観察を行い、児童の学級集団意識と授業内における発話データを収集することとした。これまで「認知的活動」や「認知的従事」などといった他者とのコミュニケーションが行われる学習行動が捉えられてきたことや中島ほか（2019）が体育授業では、児童生徒の「言語活動の充実」を実現させることが課題であることを指摘していることから、話し合い活動の重要性が窺える。さらに、学級集団意識は考えたり、工夫したりして、めあてをもって学習する体育授業評価の「学び方」と高い相関値が認められたことが明らかにされていること（日野ほか、2000、p.606）から、話し合い活動

における他者との関わり方と関連することが考えられる。そのため、多様である学習行動の中でも児童の発話内容に着目することとし、単元の中でも児童がグループ内において、自己や仲間、チームの課題、ゲームにおける作戦について仲間と話し合う活動が主として設定されている時間に限定して発話データの収集を行った。具体的なデータの収集方法と収集理由については、以下に明記する。

3-1. 児童の学級集団意識の測定

これまでも学級集団意識に関する調査票の開発を目的とした研究が行われてきたが、日野ほか（2000、p.600）は、それらの研究が直接教科指導との関係について検討したものではないことを指摘しており、先行研究を整理しながら学級集団意識の調査票を新たに作成し、子どもの体育授業評価との関係を検証している。本調査においても、学級集団意識と子どもの体育授業における学習の様子との関係を検証するため、児童の学級集団意識を測定するにあたっては、日野ほか（2000）が作成した学級集団意識の調査票を使用することとした。質問内容は、「あなたのクラスには、けんかやめめごとが多いと思いますか。」などの「人間関係」に関する項目や「あなたは、もっとたくさん勉強したいなあ、と思うことがありますか。」などの「学習意欲」、「あなたのクラスでは、誕生会やクラス会、班対抗ゲームなどをよくやりますか。」などの「活動性」、「あなたのクラスの友だちといっしょに遊んだり、話したりするのが好きですか。」などの「雰囲気」といった4因子16項目で構成されている。質問項目への回答は、先行研究に倣い、「○」「△」「×」の3段階とし、「○」に3点、「△」に2点、「×」に1点を与えることとした。

3-2. 授業内における児童の発話内容

体育授業における学習行動の一側面として、児童の具体的な話し合い内容や言語的な関わりを明らかにするため、発話内容を指標として取り上げる。発話データを収集する対象者は、A'学級とB'学級ごとに得られた学級集団意識の中央値を基準として分類された学級集団意識高群および学級集団意識低群の中から無作為に3名ずつ抽出した。そのため、A'学級で6名、B'学級で6名の計12名の発話データの収集を行った。発話データの収集は、これまでビデオカメラでの撮影（浅川ほか、2016、p.3）や観察者がICレコーダーを持って録音する方法（加登本ほか、2014、p.87）が採られている。しかし、そのような方法では児童の普段の学習環境と異なってしまうことが考えられるため、体育授業において言語的コミュニケーションデータを収集していた中島（2017、p.32）や中島ほか（2019、p.128）、高橋ほか（2019、p.104-105）の方法に倣い、児童たちには体育用ビブスの胸部分に縫い付けた透明のビニールケース内に小型のICレコーダーを入れ、授業の妨げにならないようにデータ収集を行うこととした。回収後、発話データを文字に書き起こし、発話内容

表1 各対象授業における単元計画表

A'学級におけるゴール型ボール運動（タグラグビー）の授業

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目
目標	タグラグビーの行い方を理解することができるようにする。	一人で相手をかわす動きを知り、その技能を身に付けることができるようにする。	連携して相手をかわす動きを知り、その技能を身に付けることができるようにする。	相手の攻撃を防ぐための動きを知り、その技能を身に付けることができるようにする。	他者が考えた作戦の意図を想像したり動きで試したりする活動を通して、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだり考えたことを他者に伝えたりすることができるようにする。		
学習の流れ	ルールや行い方の理解	準備運動	準備運動	準備運動	準備運動		
	準備運動	個人の攻めに関する技能練習	チームの攻めに関する技能練習	守りに関する技能練習	自己やチームの特徴に応じた作戦について考える		
	試しのゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム		
	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り		

A'学級におけるネット型ボール運動（バレーボール）の授業

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目
目標	バレーボールの行い方を理解することができるようにする。		スパイクを打つためのポイントを知り、その技能を身に付けることができるようにする。		レシーブをするためのポイントを知り、その技能を身に付けることができるようにする。		自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだり考えたことを他者に伝えたりすることができるようにする。
学習の流れ	動画視聴を通した行い方の理解		準備運動	準備運動	準備運動	準備運動	準備運動
	準備運動		チームでのスパイク練習	ペア練習での自己の課題把握と解決	チームでのレシーブ練習	ペア練習での自己及び仲間の課題把握と解決	チームの特徴やそれに応じた作戦を考える
	試しのゲーム		ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム
	振り返り		振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り

B'学級における陸上運動（走り高跳び）の授業

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
目標	学習の見通しをもつ。	5歩のリズミカルな助走ができるようにする。	自己やグループの能力に適した課題を見付け、課題に応じた練習の場や段階を選ぶことができるようにする。	自己や仲間の動きの変化や伸びを見付けたり、考えたことを他者に伝えることができるようにする。	自己やグループの課題に応じた練習の場や段階を選ぶことができるようにする。	上体を起こして力強く踏み切ることができるようにする。
学習の流れ	準備運動	準備運動	準備運動	準備運動	準備運動	準備運動
	単元の学習目標の確認	本時の学習目標の確認	本時の学習目標の確認	課題を見付ける活動	グループでの競争	簡単なルールを選択し、競争
	試しの運動	グループの合計点数による競争	競争を通した課題発見	グループで課題解決の場を選択	グループで場を選択し、課題を解決	ヒーローインタビュー
	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り

B'学級におけるゴール型ボール運動（セーフティーエリア・バスケットボール）の授業

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
目標	セーフティーエリア・バスケットボールのルールを知るとともに、これからの学習の見通しをもつことができるようにする。	ゲームを行い、ルールを理解することができるようにする。	自分たちのチームの特徴を確認することができるようにする。	味方が受けやすいようにボールをつなぐことについて考えたことを他者に伝えることができるようにする。	得点しやすい場所に移動するためにボール保持者とボールを持っていない人の役割を踏まえた作戦を選ぶことができるようにする。	ボール操作とボールを持たないときの動きによって、勝敗を受け入れながら総当たり戦を行うことができるようにする。
学習の流れ	準備運動	準備運動	準備運動	準備運動	準備運動	準備運動
	単元の学習目標の確認	本時の学習目標の確認	課題を見付ける活動	課題を見付ける活動	ゲームの練習と分析	本時の学習目標の確認
	試しのゲーム	グループの合計点数による競争	チームで分析	ゲームを通した分析とチーム練習	自チームに応じた作戦の選択	総当たり戦
	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り

が変わらないように配慮しながら文章を整えるクリーニング作業を行った。その後、プライバシー保護の観点から個人名を仮名に変更したものを質的データとした。

4. 分析方法

本調査では、2学級を対象としており、学級によって対象授業や授業目標、学習の流れが異なるため、2学級

の児童を合わせて群分けを行うことは困難である。そのため、分析方法はクラス内で学習成果の比較を行っている上江洲ほか（2011）や小畑ほか（2013）の方法に倣い、3-2でも述べたような方法を用いて、学級集団意識高群と学級集団意識低群の2群に分類した。その結果、A'学級においては、18名（男子8名、女子10名）が学級集団意識高群、17名（男子11名、女子6名）が学級集団意

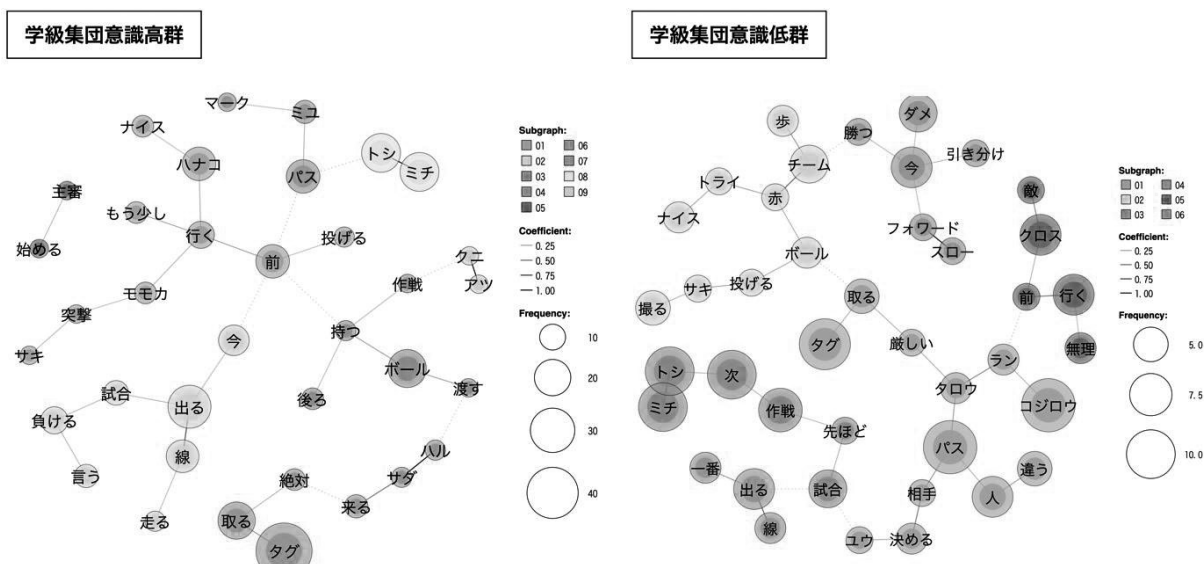


図1 学級集団意識別にみた児童の発話内容における共起ネットワーク

(A'学級：タグラグビー 7時間目)

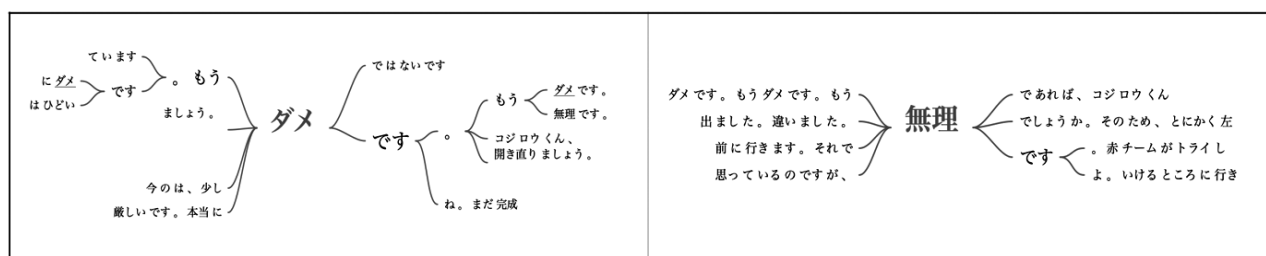


図2 学級集団意識低群の発話内容における「ダメ」「無理」のワードツリー

(A'学級：タグラグビー 7時間目)

識低群に分類された。B'学級においては、12名(男子5名、女子7名)が学級集団意識高群、14名(男子7名、女子7名)が学級集団意識低群に分類された。収集した発話内容については、児童の具体的な話し合いの様子を捉えるため、学級集団意識高群及び低群ごとにテキストマイニングによって共起ネットワーク(KH Coder3)及びワードツリー(NVivo 12)を出力して分析を行った。共起ネットワークは、「語と語のつながり関係、段落または文における語の出現パターンの類似性をもとに、文章中におけるそれらの語のつながり関係をネットワーク図として可視化したもの」(福井・阿部, 2013, p.3)であり、強い共起関係ほど太い線で、出現回数の多い語ほど大きい円で表示したものである。ワードツリーは、注目したい語句の前後の文脈がどのようなものかを図として示しており、語句がどのように使われているのかといったパターンを見つけることができるものである(Rachael et al., 2022)。なお、共起ネットワークはKH Coder3(樋口, 2020)を用いてプログラムに沿って実施した。分析するにあたっては、対象とした授業のスポーツ種目の違いによる発話の内容や量が異なることが想定されるが、それぞれの授業ごとに語のつながりやどのように言葉が使われているのかという文脈を整理し、4つの授業を通して共通する結果について考察することとする。

Ⅲ 結果および考察

1. 児童の学級集団意識と体育授業における学習行動との関係

まず、A'学級におけるタグラグビーの単元7時間目の授業では、「他者が考えた作戦の意図を想像したり動きで試したりする活動を通して、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだり考えたことを他者に伝えたりすることができるようにすること」を目標とし、話し合い活動が設定されていた。7時間目における児童の発話内容を分析した結果、学級集団意識高群においては、「ハナコ」「サキ」「モモカ」「ミュ」「サダハル」といった個人名の語が多く現れており、「ナイス」「行く」「突撃」「パス」「来る」などの語と繋がっている様子がみられた。一方、学級集団意識低群では、「タロウ」「コジロウ」「ユウ」「サキ」「トシミチ」といった個人名の語に対して、「パス」「ラン」「決める」などの語と繋がっている様子がみられた。そのほか、学級集団意識高群ではみられなかった「ダメ」「無理」などの語が個人名やほかの語と繋がっていた(図1)。「ダメ」「無理」という語については、語句単体ではネガティブな意味として使われることが多いが、どのような文脈の中で使われていたのかによって意味が異なるため、「ダメ」「無理」という語についてワードツリーによる文脈分析を行った(図2)。その結果、「もうダメ

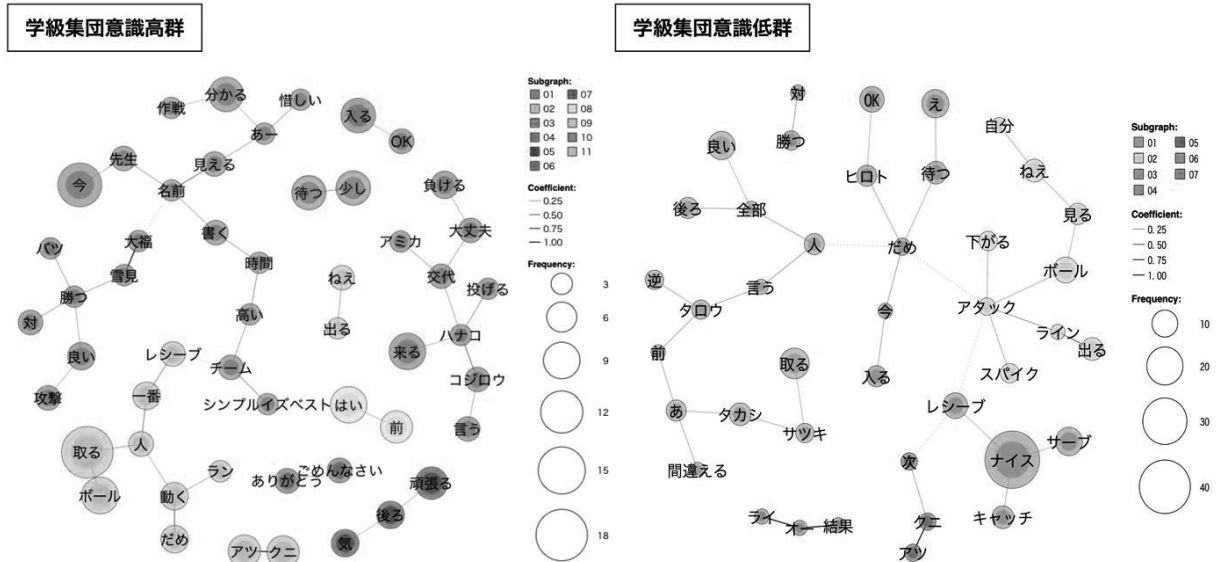


図3 学級集団意識別にみた児童の発話内容における共起ネットワーク

(A'学級：バレーボール 7時間目)

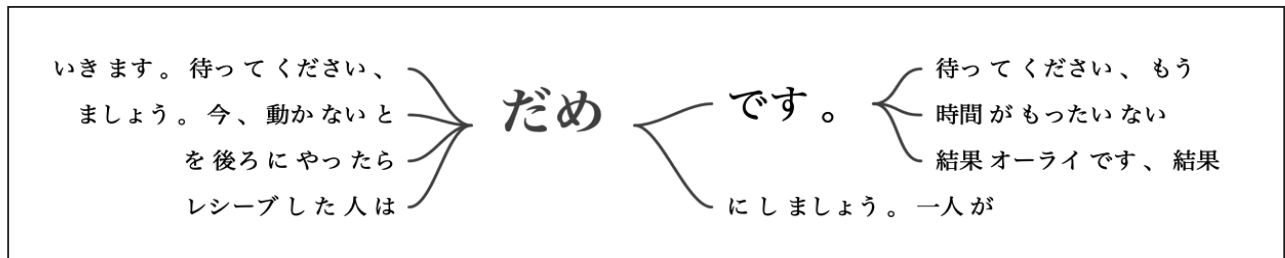


図4 学級集団意識低群の発話内容における「だめ」のワードツリー

(A'学級：バレーボール 7時間目)

です」「本当にダメです」「ダメではないです」や「もう無理です」「無理ですよ」「それで無理であれば…」といった発話がみられた。一部を除いて、学習への取り組みに対する消極的な姿勢や諦めを感じていることから、ネガティブな意味として「ダメ」「無理」という語を使っている様子が窺えた。

次に、A'学級におけるバレーボールの授業では、「自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだり考えたことを他者に伝えたりすることができるようにすること」を目標とし、話し合い活動が設定されていた単元7時間目を対象授業とした。7時間目における児童の発話内容を分析した結果、学級集団意識高群では、「ラン」「アミカ」「ハナコ」「コジロウ」といった個人名の語に対して、「動く」「交代」「来る」「言う」などといった語と繋がっている様子がみられた。学級集団意識低群については、「サツキ」「タロウ」といった個人名の語に対して、「取る」「前」などの語と繋がっている様子もみられたが、タグラグビーの授業においても見られた「だめ」という語が個人名と繋がっていた(図3)。そのため、タグラグビーと同様に、「だめ」という語について文脈分析を行ったところ、「今、動かないとだめです」「後ろにやったらだめです」「レシーブした人はだめにしましよう」といった発話がみられた。ネガティブな意味ばかりではなく、

作戦の提案をする場面などに使われている様子が示された(図4)。

B'学級における走り高跳びの授業では、「自己やグループの課題に応じた練習の場や段階を選ぶことができるようにすること」を目標とし、話し合い活動が設定されていた単元5時間目を対象授業とした。5時間目における児童の発話内容を分析した結果、学級集団意識高群では、「ハナ」「ジロウ」「イチロウ」「チヒロ」といった個人名の語に対して、「跳べる」「ナイス」「确实」「良い」などといった語と繋がっている様子がみられた。学級集団意識低群でも高群と同様に、「サキ」「マユ」という個人名に対し、「助走」「前」などと繋がっている様子が一部みられた(図5)。しかし、これまでと同様に、「だめ」「無理」といった語がほかの語と繋がっていたため、ワードツリーから文脈分析を行うこととした。その結果、「緑の線をこえたらだめです」「5cm上げます。だめかな」「いきます。ダメです」や「90cmは無理ですね」「無理でした」「多分無理です」といった発話がみられた。一部ルールを周知する目的として使われている反面、記録の挑戦に消極的な姿勢や失敗をネガティブに捉えていることで、「だめ」「無理」といった語が多く使われている様子が窺えた(図6)。

B'学級におけるセーフティーエリア・バスケットボー

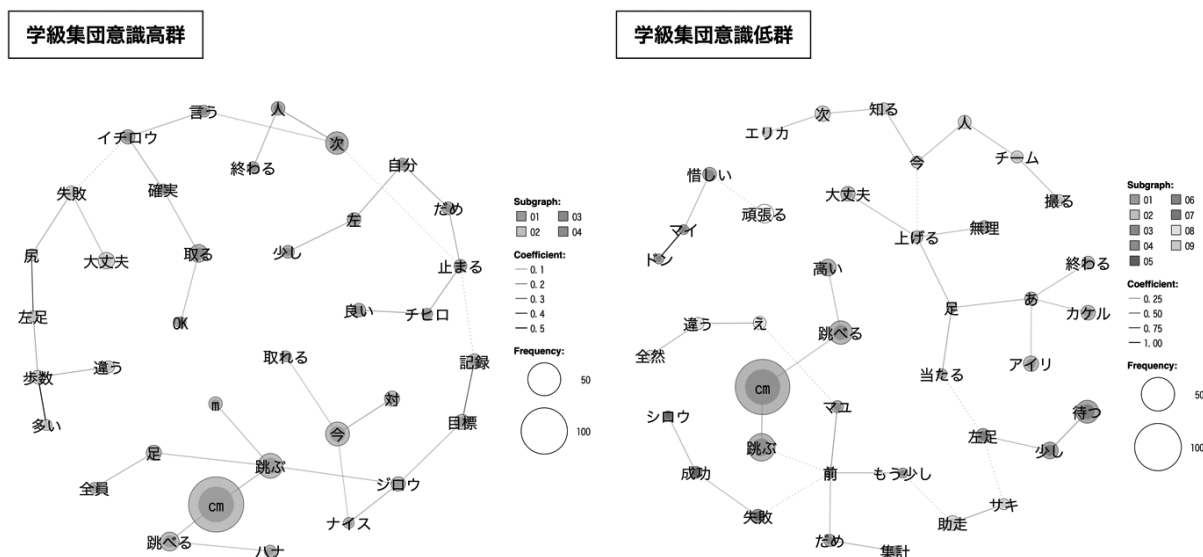


図5 学級集団意識別にみた児童の発話内容における共起ネットワーク

(B'学級：走り高跳び 5時間目)

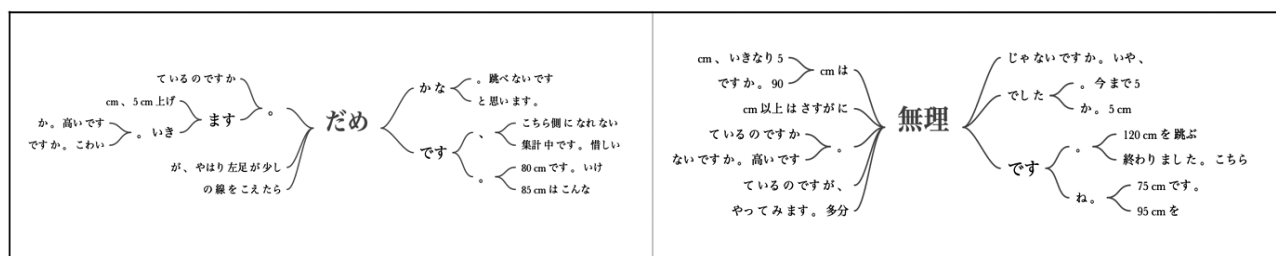


図6 学級集団意識低群の発話内容における「だめ」「無理」のワードツリー

(B'学級：走り高跳び 5時間目)

ルの授業では、「得点しやすい場所に移動するためにボール保持者とボールを持っていない人の役割を踏まえた作戦を選ぶことができるようにすること」を目標とし、話し合い活動が設定されていた単元5時間目を対象授業とした。5時間目における児童の発話内容を分析した結果、学級集団意識高群では、「モモカ」「ユウ」「カケル」といった個人名の語に対して、「前」「入る」「渡す」などの語と繋がっている様子がみられた。学級集団意識低群においても同様に、「アミカ」「ヒナコ」「サツキ」といった個人名の語に対して、「マーク」「取れる」「止める」などの語と繋がっている様子がみられた（図7）。しかし、学級集団意識低群は上述した授業と同様に、「だめ」「無理」が個人名や他の語と繋がっていたため、文脈分析を行った。その結果、「ハヤトくん、だめです」「それだめです」「全然だめです」や「入らないです、無理」「ここは絶対無理ですよ」「無理に回そうとしない」「本当に無理だと思ったら…」といった発話がみられた。作戦を話し合う中で自分たちの動き方を確認する場面に使われている様子も一部見られたが、ネガティブな意味としての仲間に対する言葉がけや失敗することの決めつけとして、「だめ」「無理」といった語が多く使われている様子が窺えた（図8）。

児童の発話内容については、4つの授業を対象授業と

し、学級集団意識高群と学級集団意識低群ごとに語のつながり関係を見る分析を行った後、学級集団意識低群において共通してみられた「だめ」や「無理」といった語について文脈分析を行った。その分析の結果、全ての授業において違いがみられた。具体例を挙げると、タグラグビーにおける7時間目の授業では、高群が「ハナコ」「サダハル」「モモカ」などの個人名の語に対して、「ナイス」といったポジティブな語や「行く」「パス」「来る」といった動きに関する語と繋がっている様子が特徴として窺えた。学級集団意識低群においては、個人名の語に対して、動きに関する語との繋がりも一部みられた。しかし、「だめ」「無理」などの語が他の語と繋がっている様子がみられ、文脈分析を行うと、学習に対する消極的な姿勢や諦め、仲間へのネガティブな言葉がけを行っている様子も窺えた。これらのことを踏まえると、学級集団意識高群は学習に取り組む中で、グループの仲間などに対し、名前を呼びながらポジティブな声かけや動きに関する指示・アドバイスをしていたことが特徴として示唆された。平野ほか（1997, p.46）は、他人と協力することや意見を交わすことといった肯定的な人間関係や情動的行動は、形成的授業評価にプラスに関係することを明らかにしている。また、練習やゲーム中に仲間をほめたり、助言を与えたりすることなどの肯定的人間関係

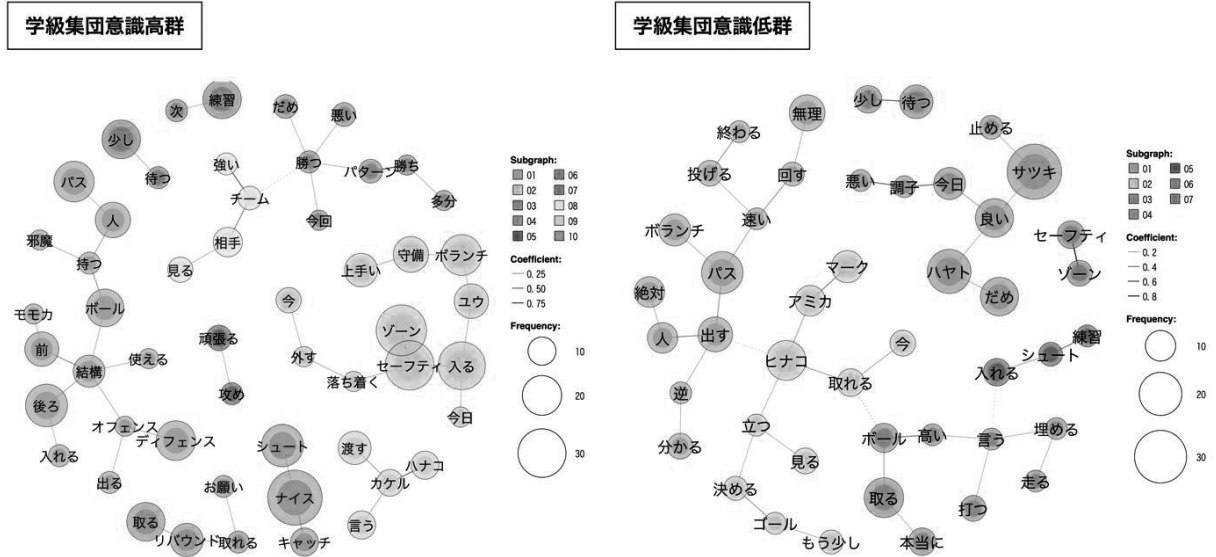


図7 学級集団意識別にみた児童の発話内容における共起ネットワーク (B'学級：セーフティーエリア・バスケットボール 5時間目)

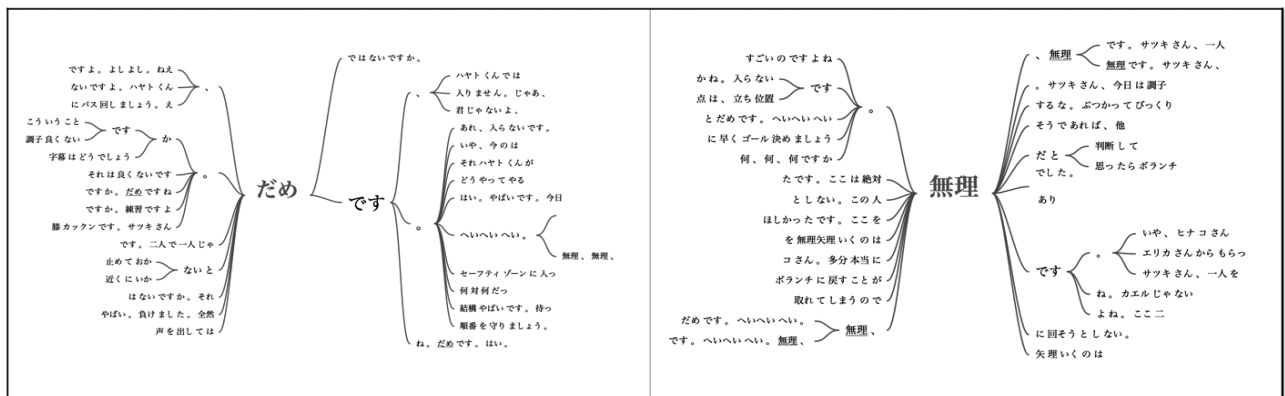


図8 学級集団意識低群の発話内容における「だめ」「無理」のワードツリー (B'学級：セーフティーエリア・バスケットボール 5時間目)

行動は仲間に対する好意的な態度だけでなく、主体的な学習姿勢や技能的・認知的成果にも影響することが示唆されている(米村ほか, 2004, p.238)。つまり、学級集団意識高群でみられたような仲間に対して肯定的な声かけやアドバイスをを行っていることが、体育授業における子どもの主体的な学習姿勢や技能的・認知的な学習成果と関係することが推察できる。

以上のことをまとめると、児童の学級集団意識によって体育授業における他者との関わり方である言語的コミュニケーションの内容について違いがあることが明らかとなった。さらに、学級集団意識高群が行っていた他者へのポジティブな関わりや動きに関する指示・アドバイスなどの関わりが学習成果に関係することが示唆された。

IV まとめと今後の課題

本研究では、児童の学級集団意識と体育授業における学習行動との関係性についてテキストマイニングによる量的な分析と文脈分析から検討を行うことを目的とした。これまでの体育授業研究では、子どもの学級集団意

識と体育授業における学習成果の視点から、体育授業と学級集団とのつながりについて言及されてきた。しかし、子どもの学級集団意識と学習成果の間には子どもの学習行動が存在するため、子どもの学級集団意識と体育授業における学習行動との関係について検討を行い、体育授業と学級集団との関係について捉え直すこととした。また、児童の学習行動を捉えるために用いられてきた組織的観察法についても課題が指摘されてきたため、児童の具体的な発話データに着目することとした。

結果から、学習行動の一側面として捉えた児童の発話内容について、学級集団意識高群は学習に取り組む中で、グループの仲間などにポジティブな声かけや動きに関する指示・アドバイスをを行っていたことに対し、学級集団意識低群は学習に対する消極的な姿勢があることや仲間

にネガティブな声かけを行っていることが違いとして示唆された。このことから、学級集団意識は体育授業における他者との関わり方という学習行動と関連が強いことが考えられる。

しかし、課題として残されたこともいくつか存在するため、今後の課題として述べておくこととする。まず、

一つ目に対象学級が2学級であることや対象授業は各学級で2授業のみであったことに加え、児童の発話内容については各学級から6名をサンプリングしてデータ収集を行なったため、学級集団意識高群および学級集団意識低群の特徴を捉えきれていない可能性が考えられる。そのため、さらに対象学級、対象授業を増やすことや児童全員の発話内容を収集することで児童の学級集団意識と体育授業における学習行動との関連についてより詳しく検討することができると考える。二つ目に、本研究では共起ネットワークによる分析を主として行ったが、その分析では上述したように学級集団意識高群および低群の特徴を捉えきれていない可能性がある。共起ネットワークは出現回数の多い語が大きい円として表示されるものであり、今回は4つの対象授業を通して共通する結果を取り上げた。そのため、一部の授業において学級集団意識高群で出現していた否定的な語や学級集団意識低群で出現していた肯定的な語、出現回数は少ないが重要となる語などについては考察することができなかった。今後は、量的および質的な分析をあわせて行うことや重要となる語を丁寧に取り上げることで複眼的に検証していきたい。三つ目に、今回の調査では学習行動の一側面として発話内容を取り上げたが、学習行動は多様であるため、運動への従事や身体活動などとの関連についても明らかにしていくことや授業観察やインタビュー調査を行い、学習行動をより立体的に捉えた上での検討が必要になるだろう。四つ目に、学級の中で学級集団意識高群と学級集団意識低群の2群に分類したが、学級集団意識が高い学級と学級集団意識が低い学級において、同一授業を行う中での学習行動や学習成果の比較検討など、より条件を統制した中での検討も必要であると考えられる。

上述したように解決・改善していくべき点は多数存在するが、これまで検討が行われていなかった学級集団意識と学習行動との関連に着目し、本研究で得られた結果は体育授業と学級集団とのつながりについて新たなアプローチから示唆を与えるものであると考えられる。

文 献

浅川孝太・松本健太・岡田雄樹・針谷美智子・近藤智靖 (2016) 小学校体育授業における運動技能水準上位児・下位児に関する事例的研究－学習課題・教師・仲間との関わりに着目して－. 日本体育大学スポーツ科学研究, 5: 1-11.

福井美弥・阿部浩和 (2013) 異なる文体における共起ネットワーク図の図的解釈. 図学研究, 47 (4): 3-9.

長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子 (1995) 小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み. スポーツ教育学研究, 14 (2): 91-101.

樋口耕一 (2020) 社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－. 第2版 ナカ

ニシヤ出版.

日野克博・高橋健夫・八代勉・吉野聡・藤井喜一 (2000) 小学校における子どもの体育授業評価と学級集団意識との関係. 体育学研究, 45 (5), 599-610.

平野智之・高橋健夫・日野克博・吉野聡 (1997) 体育授業における集団的・情意的行動観察法の開発. スポーツ教育学研究, 17 (1): 37-51.

細越淳二・鋤柄純忠 (2002) 子どもの体育授業態度評価と学級に対する意識との関係. 茨城キリスト教大学紀要, 社会・自然科学, 35, 99-109.

加登本仁・大後戸一樹・木原成一郎 (2014) 小学校体育科のボール運動の授業における学習集団の形成過程に関する事例研究－エンゲストロームの活動理論を手がかりとして－. 日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』, 39: 83-94.

河村茂雄・武蔵由佳 (2016) 小学校におけるアクティブラーニング型授業の実施に関する一考察－現状の学級集団の状態からの検討－. 教育カウンセリング研究, 7 (1): 1-9.

文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説体育編. 東洋館出版社: 東京都.

文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説保健体育編. 東山書房: 東京都.

武蔵由佳・河村茂雄 (2015) 小学校における学級集団の状態像と児童の学級生活意欲およびソーシャルスキルとの関連. 学校経営心理学研究, 4: 29-37.

中井隆司・高橋健夫・岡沢祥訓 (1994) 体育の学習成果に及ぼす教師行動の影響－特に、小学校における台上前転の実験的授業を通して－. スポーツ教育学研究, 14 (1): 1-15.

中島寿宏 (2017) 中学校体育授業における熟練教師と教育実習生の授業者としての違い－生徒の言語的コミュニケーション量と教師による生徒へのかかわりに着目して－. 北海道体育学研究, 52: 29-37.

中島寿宏・河本岳哉・高橋正年 (2019) 中学校体育における教師への言語的コミュニケーションデータのフィードバックによる授業改善の試み－ダンス授業における生徒の対話的学習活動に着目して－. 北海道体育学研究, 54: 125-132.

根本橋夫 (1983) 学級集団の構造と学級雰囲気およびモラルとの関係. 教育心理学研究, 31 (3): 211-219.

根本橋夫 (1987) 学級集団の独自性からみた学級風土の規範, 構造および風土. 心理科学, 11 (1): 1-16.

小畑治・岡沢祥訓・井上寛崇・石川元美 (2013) 運動有能感を高める跳び箱運動の授業づくり－子どもの主体的な学びの追求をもとに－. 奈良教育大学 教育実践開発研究センター研究紀要, 22: 315-320.

小野寺正己 (2020) 学級集団の違いが学習意欲及び学力に及ぼす影響の縦断的検討. 学校経営心理学研究, 9: 1-5.

- Pieron, M. and Cheffers, J. (1988) Research in sport pedagogy : empirical analytical perspective. International Council of Sport Science and Physical Education, 2.
- Rachael Walshe, N.S. (Snowy) Evans and Lisa Law (2022) Mapping community gardens in the Australian National Curriculum: A curriculum analysis model. Issues in Educational Research, 32 (2) : 784-804.
- 高橋正年・中島寿宏・河本岳哉・神林勲 (2019) 中学校体育授業における言語的コミュニケーションと運動技能との関係－短距離走の質的・量的データによる比較から－. 北海道体育学研究, 54 : 101-111.
- 高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司 (1989a) 教師の「相互作用」行動が児童の学習行動及び授業成果に及ぼす影響について. 体育学研究, 34 (3) : 191-200.
- 高橋健夫・岡沢祥訓・大友智 (1989b) 体育のALT観察法の有効性に関する検討－小学校の体育授業分析を通して－. 体育学研究, 34 (1) : 31-43.
- 巽俊也 (2018) 小集団の学びが子どもの学級集団意識に及ぼす影響要因に関する研究－小学校3年生体育科授業の事例より－. 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」, 10, 73-82.
- 上江洲隆裕・岡沢祥訓・木谷博記 (2011) 教師の言語活動による「継続的フィードバック」が技能成果、運動有能感に及ぼす影響に関する研究－走り幅跳びの授業実践を通して－. 教育実践総合センター研究紀要, 20 : 159-166.
- 米村耕平・福ヶ迫善彦・高橋健夫 (2004) 小学校体育授業における「授業の雰囲気」と形成的授業評価との関係についての検討. 体育学研究, 49 (3) : 231-243.

〔令和4年3月31日 受付〕
〔令和4年8月18日 受理〕